

6/5 使徒の働き 2 章 22-36 節 「主を十字架につけたのは誰か」

小池 宏明 牧師

ペンテコステ（聖霊降臨祭）を心から喜ぼう。主イエス・キリストの復活から 50 日後、まことに不思議な奇蹟が起きた。（使徒 2 章 2-4 節）イエス様の誕生の時も、奇蹟の連続だった。キリストの生誕、十字架と復活が歴史の中で繰り返し起きた出来事ではない。ペンテコステの出来事も歴史の中でただ一回起きた出来事なのだ。それは世界宣教の出発を記念する日となった。そして、聖霊なる神様の働きは、ずっと継続している。聖霊に依らなければ、誰一人、「イエスは主」「救い主」と告白することはできない。今を生きる私たちにも、間違いなく、聖霊が臨んだ。聖霊の働きが、私たちの上にも、確かにある。

*ペテロの説教と悔い改め

この日のペテロの説教の強調点は、繰り返し訴えているところだ。それは 23 節と 36 節で「あなたがたがイエスを殺した」という迫りだ。この説教を聞いた当時の人々は、心を刺されて、助けを求めた。（37、38 節）

全世界に向けて、福音を宣べ伝える教会は、まず、心刺され、悔い改めることから、出発した。歴史的にも、信仰復興（リバイバル）の始まりは、真実な悔い改めから起こっている。もし、私たちに真の悔い改めがないならば、教会の未来は暗い。

世の中には「罪」とか「悔い改め」とか聞くと嫌がる人がいる。しかし、それは人の罪を指摘して失望させるためではない。赦しと救いがあるからこそ「あなたに罪がある」「あなたがキリストを十字架に架けて殺した」と、御霊の導きによって訴えることができる。自らの罪に深く気付くことが、救いの始まりなのだ。もちろん、罪の自覚もまた御霊の導きによる。このペンテコステの日に、三千人もの人々が、信仰を持ち、救い出され、バプテスマの恵みを受けた。そして、心を一つにして集まる群れとなった。キリストを頭とする教会の始まりだ。この出来事を出発点として、全世界に、地の果てにまで、キリストの教会が広がっていった。

*今も続く救いの恵み

今、私たちはペンテコステの記念日を迎え、心を一つにして集まり、聖霊に導かれて、救い主イエス様を心から褒め称えている。「主を十字架につけたのはこの私です」と告白し、救い出された私たちは、今も豊かに働かれる聖霊の助けを頂いて、主イエス様を証し続けて生きたい。